

国際協力

JICA 駒ヶ根

現職参加教員の帰国後の活躍

2002年に制定された現職教員特別参加制度を利用し、同年、長野県で初の参加となった中山さん。現在は長野県教員等ネットワークの運営委員を務め、国際理解教育も積極的に取り組んでいます。帰国して丸5年の月日が経とうとしている今、学校長から「子どもも大人も惹きつける何かがある」と評価されるその魅力を伺いました。(長野県国際協力推進員 小林論子)

小諸市美南ガ丘小学校 教諭 なかやま はるみ 中山 晴美 さん (カンボジア・小学校教諭)
みずかみ ひるゆき 学校長 水上 博之 さん

「6年生のクラスを2年間続けて持てる女性の先生は稀だ」と二人は笑いしました。「子ども達自らついて行くような先生にしか出来ません。今までの指導経験に加えてカンボジアでの体験が自信となって、子ども達や他の教員に与える刺激や影響はとても大きい。子ども達が興味を示す『引き出し』を多く持っており、発する一言に重みもある。よって彼らも更に興味・関心を高めるし、それらを引き出すことも上手なので、子ども達の心を掴むのでしょう。また今日、何かに『貢献』するということが、なかなか出来ない環境の子ども達にとって、実際に外国で貢献活動をしてきた先生の言葉は説得力がある。2年間の苦勞や学ん



▲中山先生(左)と水上校長

できた財産とも言えるものがどこかで漂っていて、それが人を惹きつけるのだと思う」と、水上校長は協力隊経験のある教員の「持ち味」を語ります。

一方、中山先生は日々感じていることがあります。「ただ単純に子ども達はいろんなことに興味を持ち、何でも知りたがっている。だから実際体験したほんのちょっとした事を具体的に話すことによって、より関心を持ち、驚いたり、悲しんだり、感動したりする。そうした気持ちを経験することが、これから生きていく中で、役に立つかもしれない。世界にもいろんな環境の中で一生懸命生きていく子がいるということ、一方で自分達はどうか、と考えさせてあげることも必要。折角ならば本からではなく、自分の経験を通してそうしたことを伝えたいと思う」。

協力隊としての経験を押しつけるのではなく、事実をありのまま語り、各々自由に発想させる。そして、新たに子ども達から生まれた気持ちを大切に育む。この先生側のゆとりが、これからの心豊かな子ども達を導いていく秘訣なのかもしれません。

特集

JICAボランティア ～帰国後の活動～

開発途上国でボランティア活動をしてきたJICAボランティアOB・OGは帰国後、さまざまな分野で活動しています。そんな長野県在住の帰国ボランティアの皆さんや、現在訓練中のJICAボランティアの方から、現在の活動と今後の目標を語っていただきました。(教育機関の学校名、学年名は2009年2月現在のものです。)

TOPICS

現職参加教員の帰国後の活躍	P1
駒ヶ根市職員として初の現職参加!	P2
帰国後は、なぜか「介護」へ	P2
協力隊の経験は宝だ!	P3
協力隊OB会の活動	P3
お国自慢レシピ	P4
元気にやっとなるけ?	P4
エッセイコンテスト2008～結果報告～	P5
草の根の力を活かそう!	P5
長野県出身ボランティア 奮闘レポートリレー	P6
出発コメント	P7
訓練所の一日	P7
お知らせ	P8

駒ヶ根訓練所(JICA駒ヶ根)の 地域連携事業

JICAボランティア派遣前訓練の他に、県や自治体・学校等と連携した開発教育・国際理解教育の実践支援についても、随時ご相談を受付けております。

駒ヶ根市職員として 初の現職参加！

駒ヶ根市職員として初の協力隊現職参加となる丸地さん(駒ヶ根市教育委員会)。2月に二本松訓練所での派遣前訓練中の丸地さんに応募の動機から今後の抱負まで語っていただきました。職場の上司である駒ヶ根市教育次長・滝沢さんから送られたエールと共にお伝えします。

まるち
丸地

よしみ

由美さん(平成20年度第4次隊 ガーナ・行政サービス)



▲英語クラスのみなどと。(一番右端)

私が協力隊に応募したきっかけは、駒ヶ根市役所で担当していた「学校交流」との出会いでした。これは、駒ヶ根訓練所で訓練中のJICAボランティアが地域の小、中学校等へ出かけ、自分の任国、活動について児童生徒とともに学びあうという事業です。

JICAボランティアの方々の熱い思いにふれ、自分も何か途上国のためにできることがあるのではないかと思います。そして、協力隊に応募し、行政サービスという職種でガーナに派遣予定となりました。また、幸いなことに、勤務先より理解をいただき、現職参加の予定です。現在は、二本松訓練所で派遣前訓練中です。帰国後は、隊員経験者として、実際に見たこと、経験したことを子どもたちに伝える活動ができればと願っています。

行ってらっしゃい!! 丸地さん

駒ヶ根市に青年海外協力隊訓練所が開設されて30年が経過する中、やっと実現した市職員からの隊員第1号の丸地さん。その勇気と志に心から敬意を表します。

任国ガーナでは、仕事以外にも持ち前の好奇心を十分発揮され、現地の多くの人との交流や様々な体験を通じ、楽しみながらいろいろ学び、ひと周り大きくなって帰国されることを期待します。とにかく、早く現地に慣れ、健康に気を付け頑張ってください(日本の文化も伝えてね)。

駒ヶ根市教育次長 滝沢 修身さん



帰国後は、なぜか「介護」へ

NPO法人 のぞみ(長野市)

宅老所所長 伝田 景光さん(パナマ・写真)

私は現在「介護」の現場にいます。隊員時代は警察に派遣され、いわゆる鑑識科のようなところで写真技術の指導をしておりました。今の仕事とはまったく関連性がありません。自分で望んで介護の仕事をした訳でもなく必要に迫られて現在に至っています。でも、介護も協力隊も「人と関わる」という点では同じでした。スペイン語をしゃべりまくるパナマ人から、要介護状態の高齢者になっただけで、ここでも「異文化理解」が必要になってきます。高齢者の独特の世界観は若い世代と違うのです。日常のあらゆる場面でどれほど、「年寄りの事だから…」と異なった価値観を否定しているのでしょうか?

パナマ人が何を考えているのか理解しようと頑張った時と同じくらい、お年寄りが何を考えているのか理解する事が良いケアに繋がると信じて日々頑張っています。でも、パナマではいくら頑張っても現地の人々が早口で何を言っているのか分からない時も多々ありました。同じようにここでは滑舌が悪いため何を言っているのか分からない

お年寄りもいます。そんな時は、笑ってやり過ごす術も身につけました。決していい加減な事ではなく、互いの信頼関係をきちんと築き上げた上で、素直に「ごめん、何言っているのか分からない…」と言ってしまいます。良い加減のいい加減さは必要かと思えます。

異文化理解を押しさえたら、あとは必要なのは何事へも飛び込んでいく勢いかと思います。東洋の青年が、海とも山とも分からぬ所へ行く事自体「勢い」が無ければ出来ない事かと思いますが、帰国後も決してその精神は錆び付かせていけないと思います。飛び込んでしまえば何とかなること、これは、隊員経験者は良く知っている事ですね。



▲お昼は利用者さんと一緒にいただきます!
(左から3人目)

協力隊の経験は宝だ!

産建開発株式会社 白馬 山のホテル(北安曇郡白馬村)
支配人 武藤 慶太さん(ルーマニア・スキー)

現在、実家である白馬村のホテル支配人としてホテル経営しています。地元の一員として特に今は国の進める観光立国“Visit Japan Campaign”の一端を仲間とともに積極的に進めています。日本の人口減少、そしてこの経済状況、明るい材料が乏しい中、マーケットを国外にも求め、自分の職場はもちろん、この白馬という場所のアピールにも懸命に動いています。

小さな商売ではありますが、白馬という世界でも名が通る観光村の宣伝、向上の一端に関わるということで、大変面白くやりがいを感じています。相手は日本と世界です。

このような仕事環境の中、私が異国で生活し仕事をした経験は大きく生かされているといえるでしょう。協力隊でのルーマニアの2年間は現地の人との関わり、そして隊員及びスタッフとの関わりと、2つの大きな収穫がありました。双方に一生付き合っていくであろう友人ができ、そして笑って涙し喧嘩ができる本当の人間の原点の関係を見つめなおす大きな機会を与えてくれたのです。現地の人々の為にやってきたこと。実はそれ以上に大きく自分に厚みを持たせてくれました。人に感謝され、そして自分が成長する。そんな素晴らしい経験を与えてくれた2年間でした。

今、いろいろな国の人たちとビジネスで、そしてホテルでお客様と接することがありますが、いろいろな人たちとのコミュニケーション、彼らが初めてのこの地で何を求めているのか等、自分の経験した不安や喜びと置き換えて話ができます。これはあの地での体験があったからこそできるものであり、それが人に与える喜びを大きな物にすることが出来るのです。私のホテルは英語圏の一番大きなホテル口コミサイトで地区一番の評価をもらっています。この地位を維持すべく、そしてこの村を世界有数の山岳リゾートにするべく邁進するのみです。協力隊のネットワークにも今以上に協力していきたいです。



▲私(中央奥)の家族と友人、ホテルフロント前にて

長野県青年海外協力隊OB会の活動

長野県OB会
会長 松本 久幸さん(ニジェール・自動車整備)

帰国隊員の可能性は何か。この命題を掲げて活動を始めた現OB会長です。長野県内には昨年末時点で400有余名のOBが居ることを知りました。つまり400有余の才能と知識と経験と個性が長野県OB会に集う可能性があるわけです。

個性と個性の連絡係を請け負って感じたことは、実践に裏づけられたボランティア精神の根源を知ったことでした。

OB会主催で開催する行事は、OB会員の連絡会議を皮切りに、国際協力に関するエッセイコンテストの審査協力、外国人研修生や留学生との交流会、各地域での国際フェスティバル参加、派遣中の隊員のご家族との懇談会などがあります。また、分科会として、農業関係で派遣されたOBの集まり(信州食農研究会)もあり、途上国で見てきた第1次産業の実情から食の安全と流通消費の問題点を見つめなおしています。

これらの活動以外にも地域社会に自らの経験を還元すべく、自治体の委託を受けて任国の言語で行政関係の

通訳をしているOB、派遣中の隊員のご家族へ国際協力の理解を働きかけるOBもいます。在日1年目の留学生青年の協力を得て、覚えてたの日本語での講演を依頼し、日本語でのスピーチに奮闘する姿を重ねて、赴任1年目の隊員たちが任国で奮闘する様子を思い浮かべてもらう集まりも企画しました。

このような活動の中からOB会のこれからの役割は、帰国後日本の生活に埋没してしまうOBの任国での貴重な経験を掘り起こすことだと考えています。そして、ひとりのOBの経験を地域の大勢の知識として共有しなければ、貴重な財産の消失だと感じます。

「あなたの隣にも協力隊経験者はいます」と、当然のように言いたいです。



▲信州食農研究会の視察旅行(右から2番目)

お国自慢レシピ

だいぶ日本にも浸透してきたタイ料理。今ではいろいろなタイ料理キットがスーパーでも販売されるようになりました。今回は、そんなタイ料理の中でも人気の「トムヤムクン」の作り方を教えていただきました。

タイ料理

Tom yam kung (トムヤムクン)

*世界3大スープの1つとされ、辛味、酸味、塩味そして複雑な香りを持ち合わせています。トムは煮る、ヤムは混ぜる、クンはエビの意味。エビの代わりに鶏肉を入れるとトムヤムガイ、魚ならトムヤムプラーとなります。



—作り方—

1. エビを殻と身に分ける。(エビの背に切り込みを入れて背綿を取ると身が丸く固くならない)
 2. エビの殻とレモングラス、コブミカンの葉、青唐辛子、カー(ショウガの一種)等の香辛料をチキンスープで煮て、スープを作る。
 3. ナンプラー、ナム・ブリック・パオ(チリ・イン・オイルともいう)等の調味料とマナオ(ライム)の果汁で味を調える。
 4. エビの身とマッシュルームを入れる。
 5. エビに火が通ったら、仕上げにパクチー(コリアンダー)の葉を加える。
 6. お好みによってココナッツミルクをいれる。
- *なお、固形やペースト状のトムヤムクンの素が市販されており、これを使えば1~3の工程は不要。

トムヤムクン

材料 (4人前)

- エビ 8尾
- レモングラス 2・3本
- コブミカンの葉 3枚
- 青唐辛子 3個
- カー 50g
- ナンプラー 大さじ1杯
- ナム・ブリック・パオ 大さじ1杯
- マナオ(ライム) 大さじ2杯
- マッシュルーム 100g
- パクチー お好みで
- ココナッツミルク 大さじ2杯

しシビの主は誰おら？

ふくしげ 福重 かずよし 和義 さん

駒ヶ根市で毎年開かれている「みなこいワールドフェスタ」の屋台でもおなじみの「トムヤムクン」。10年間、ブースを出店している福重さんはかつて協力隊員としてタイに赴任し、帰国後はタイの子どもたちの支援などを続けており、タイ・東北地方マハサラカム県の自宅を開放して子供向けに日本語学校も開催。現在8人目の生徒が日本の大学に留学中です。



▲タイの子供たちと福重さん(下段中央)

元気にやっとなるけ？

所外活動先より 隊員へのメッセージ

飯島町にある「グループホーム道」は認知症高齢者の方々が南アルプスを望む、ゆったりとした施設で生活しています。所外活動の日、ボランティアは職員や利用者の方々と話をしたり、食事の用意をしたりしながら一日を過ごします。

グループホーム道

利用者の方々はシニア海外ボランティアを娘・息子、青年海外協力隊員を孫のような気持ちで毎回訪れるのを楽しみにしています。

最初は何をしていいのか分からず戸惑っているボランティアも、利用者の手を握ったり声をかけたりしているうちに、いつのまにかお互い笑顔になっているとか。2日間の活動を終える頃には、別れを惜しみ涙を流すシーンもあるそうです。

ある職員の方は「海外に行ったことのない利用者や職員にとって、これから2年間海外で生活をしようとしているボランティアを尊敬し、また刺激をもらっています」と。

「今、途上国で活動している皆さんには、ただ元気で頑張ってもらいたい気持ちでいっぱいです。また駒ヶ根に来ることがあればぜひ私たちの所にも顔を出して欲しい」と途上国で活躍しているボランティアの姿を思い浮かべながら語ってくださいました。



▲利用者の方とふれあうボランティア

JICA中学生・高校生国際協力 エッセイコンテスト2008～結果報告～

次の世代を担う中学生・高校生に開発途上国の現状と日本との関わりを認識し、国際社会の中での日本の果たすべき役割について考える機会の提供を目的として行われています。

2008年はテーマを「地球に生きる」として実施しました。長野県の応募数は中学生が883増の1,924、高校生は435増の1,128作品となり、対人口比では全国でも上位にあり、国際協力・国際理解、また環境問題への意識の高さが窺えました。

高校の部で駒ヶ根訓練所センター長賞に選ばれた上伊那農業高校2年の伊藤彩香さんは近所の外国人に挨拶されたことから「差別」について考え、中学生の部で同賞に選ばれた飯島中学校3年の木下暁帆さんは、テロリストの言葉から「まず知ること」が大切という考えに至ったことを記述しています。

上位入賞者の作品はJICAホームページ、長野県関連の作品は駒ヶ根訓練所のホームページに掲載しますので、是非ご一読頂き、感想等を駒ヶ根訓練所宛へお寄せ下さい。

また、エッセイコンテスト2009も夏期に実施予定ですので、奮ってご応募下さい。

長野県内の受賞者、受賞校は以下のとおりです。

◆ 個人賞

【中学生の部】

個人賞名	氏名	学年	タイトル	学校名
センター長賞	木下 暁帆	3年	戦うことの重さ	飯島町立飯島中学校
佳作	菅野 雅子	2年	テロ生活から学ぶ日本人の動き	飯島町立飯島中学校
JOCA会長賞	根橋 文女	1年	今、私ができること	南箕輪村立南箕輪中学校

【高校生の部】

個人賞名	氏名	学年	タイトル	学校名
センター長賞	伊藤 彩香	2年	安心した明日へ	長野県上伊那農業高等学校
佳作	村山 美紗	1年	「豊かな国」に生まれて出ること	長野県赤穂高等学校

◆ 学校賞

【中学の部】

学校賞名	学校名	学校賞	学校名
学校賞	駒ヶ根市立赤穂中学校	大町市立第一中学校	飯田市立高陵中学校
〃	安曇野市立三郷中学校	〃	松本市立女鳥羽中学校
〃	伊那市立伊那中学校	〃	池田町立高瀬中学校
〃	信州大学教育学部附属長野中学校	〃	南箕輪村立南箕輪中学校
〃	中野市立南宮中学校	〃	小諸市立小諸東中学校
		〃	信州大学教育学部附属松本中学校

【高校の部】

学校賞名	学校名	学校賞	学校名
特別学校賞	長野県上伊那農業高等学校	安曇野市立穂高東中学校	飯島町立飯島中学校
学校賞	長野県下伊那農業高等学校	〃	長野市立柳町中学校
〃	長野県赤穂高等学校	〃	千曲市立屋代中学校
〃	長野県下高井農林高等学校	〃	伊那市立西箕輪中学校
〃	長野県上田染谷丘高等学校	〃	諏訪市立諏訪南中学校
〃	長野県飯田風越高等学校	〃	飯田市立竜東中学校

～草の根の力を活かそう！～

JICAの市民参加事業である「草の根技術協力事業」は、NGOや自治体、大学等がこれまでに培ってきた経験や技術を活かして企画した途上国への協力活動をJICAが支援し、3年間共同で実施する事業です。開発途上国の人々の生活改善・生計向上に直接役立つ分野で、草の根レベルのきめ細やかな活動が行われる事業を対象としています。

今年度活動を始めた2つの事業を紹介します。

① 「中国内モンゴル自治区ドキトラ村 食物残渣を利用した有機肥料生産」

NPO「日中蒙農業交流協会」(伊那市)が実施。ドキトラ村で農業生産の持続可能な環境を作るため、有機肥料作りの指導を行っています。2年目には研修員を日本に受け入れ、野菜ポットを使用した苗作りを研修してもらう予定です。

② 「パキスタンムルフン村 リンゴ栽培で村おこし」

上伊那郡飯島町国際協力が実施。ムルフン村に立派なリンゴを実らせ、村民の生活向上に役立てようと平成16年から17年まで実施したプロジェクトの2回目。1月中旬 同村のアムシャット・アリさん、シャラファット・

アリ・ハーンさんの2名が来日。2月下旬までリンゴの剪定などの技術を町内のリンゴ栽培農家で学びました。



▲飯島町で剪定研修中のアリさん(右)とシャファーさん

このほかに、平成19年から千曲市国際協力協会が、アフガニスタンの医療技術向上を支援するために、アフガニスタン人医師を受入れて信州大学医学部付属病院で研修を行っています(くわしくは「信州発国際協力」2007年秋号で紹介しています。JICA駒ヶ根のホームページからも閲覧いただけます)。

また、2月に長野県看護大学がサモアで肥満・生活習慣病予防のためのプロジェクトを開始しました。

「草の根技術協力事業」に関するお問い合わせは、JICA駒ヶ根 市民参加担当まで

ボランティア 奮闘レポート

report_44

パラグアイ

小学校教諭（下伊那郡高森町）

青年海外協力隊

なかつか ようすけ

中塚 洋介さん

「南半球」「時差 12 時間」。現在、私は日本と真反対の国パラグアイにいます。到着直後の 7 月は寒過ぎて寝袋に包まって寝ていましたが、夏真っ盛りの 2 月現在は暑過ぎです！暑過ぎて（？）私の町の店は、基本的に昼間は開いていません。人々曰く「昼間は暑くて買い物に来ないでしょ。」とのことでした…。

こんな気候の国で、私は小学校教諭として現地の先生と一緒に体育の授業をしています。パラグアイの多くの学校は二部制で、子どもたちは午前又は午後のどちらか決まった方だけ登校します。また休みが多く、土日や長期休みだけでなく、雨のため休み（道路が未舗装のため登校できない等の理由）、という場合もあります。

そんな事もあり、体育の授業数は日本の半分以下です。だからこそ、子どもたちは体育の時間をとても楽しみにしており、「校庭に行きましょう」の声を聞くと、毎回ものすごい歓声があがります！

しかしながら、実際行われているのは主にストレッチとサッカーです。というのも、狭い校庭とサッカーボール 3 つしかないからです。

現在は、道具や場所が無くても、子どもたちができるだけ多くの動き・スポーツを経験したり身につけたりできるよう現地の先生と考えています。

子どもたちの歓声が更に大きく、そしてもっともっと体育が好きになってもらえたらと思っています。



▲市主催のフットサル大会で配属先小学校が優勝

ニカラグア
パラグアイ

report_45

ニカラグア

小学校教諭（下伊那郡高森町）

青年海外協力隊

しみず としひろ

清水 理博さん

中米のニカラグアで小学校教諭として活動しています。日本にいた頃は名前すら知らなかった“ニカラグア”。逆にニカラグアの人々は“日本”という国を知っている人が多く、嬉しくなります。さすがに“ナガノ”という県名までは難しいようですが…。雪のないニカラグアでは「冬季オリンピックのあった所」と言ってもわかりにくいようです。

そんなニカラグアの食事を少し紹介。日本と同じくお米を毎日食べます。それから煮豆。他にはとうもろこしを使った料理など。日本の料理より油の使用量が多いため、初めは日本食が恋しくもなりましたが、1 年半経った今ではすっかりニカラグア料理のとりこです。



▲算数の授業風景

普段は小学校で算数の授業や、先生方の授業作りのお手伝いをしています。「子ども達は世界共通。違いを挙げるとするなら、周りの大人や子どもを取り巻く環境」。実際に 1 年半子ども達や同僚の先生方と付き合ってみて、そう思うようになりました。掛け算の 7 の段に苦労したり、問題が解けると嬉しくなったり、休日の前はそわそわしたり…。僕らも同じですよ。

親切的なニカラグアの人たち。残りわずかな活動期間、受けた恩を出来る限り返していきたいと思う今の自分です。

パラグアイ共和国

面積：40万6,752km²（日本の約1.1倍）

人口：610万人（2007年、世銀）、

首都：アスンシオン（人口約50万人）

住民：混血（白人と先住民）97%、欧州系2%、

その他1%

言語：スペイン語、グアラニー語（ともに公用語）

宗教：主にカトリック（信教の自由は憲法で保障）

（外務省HP：各国・地域情勢より）

ニカラグア共和国

面積：12万9,541km²（北海道と九州を合わせた広さ）

人口：514万人（2005年国勢調査）

首都：マナグア

住民：混血70%、ヨーロッパ系17%、アフリカ系9%、

先住民4%

言語：スペイン語

宗教：カトリック教

（外務省HP：各国・地域情勢より）

行ってらっしゃい!! 長野県出身・新ボランティアのみなさん

長野県出身のボランティア計7名が3月下旬に、それぞれの任国へ出発しました。
(敬称略。かっこ内は派遣国名/職種/出身市町村)

【青年海外協力隊】



うちだ たくみ
内田 匠さん
(ニジェール/村落開発普及員/長野市)

日本から1万km以上離れている砂漠の国。2年間任地の人々と協働し、活動してきます。また少しでも、砂漠だけではなく多様なニジェールを日本で知っていただけるよう、帰国後も何らかの形で貢献できたらと考えています。



まるち よしみ
丸地 由美さん
(ガーナ/行政サービス/駒ヶ根市)

ガーナ西部のアゴナハンタ郡役所に行政サービス向上のため派遣されます。現地では、市町村のデータ、予算の管理などの支援を行います。この機会を与えていただいたことに感謝し、ガーナの人々とともに学べる2年間にしたいです。

【シニア海外ボランティア】



くらいし だいすげ
倉石 大資さん
(ウガンダ/理数科教師/長野市)

ウガンダに理数科教師として派遣されます。私の行く中学校には正規の理数科教師がいません。ウガンダの子供たちに少しでも数学や理科の面白さがわかってもらえるようにがんばります。一人一人の力は砂漠に降る一滴の雨のようにすぐに消えてしまうかもしれませんが、現地の人と力をあわせて良い活動を持続的にやりたいと思います。



くどう もとひこ
工藤 元彦さん
(チリ/経営管理/安曇野市)

南米チリの首都サンティアゴに現地企業の生産性向上の指導に行きます。チリは日本と同じように細い国ですが面積は日本の2倍あります。長年培った技術と経験を生かして現地スタッフとともに国づくりの応援をし、楽しい2年間としたいと思います。



ながさか あつし
長坂 篤志さん
(パプアニューギニア/村落開発普及員/北佐久郡御代田町)

この度、4年間勤めました御代田町にありますが会社に許可をいただき現職参加という形で、2年間海外ボランティア活動させていただきます。常に周りの方にサポートしていただいている事に対して感謝し、忘れず、自分の出来る事から精一杯任国で活動したいと思っております。貴重な経験を通し、一回り大きく成長して帰ってきます!



たにくち みちこ
谷口 美智子さん
(タイ/看護研究/上伊那郡宮田村)

バンコクから650km北東部にある看護大学へ1年間派遣されます。任地の教員と協働しながらこれまでの看護教育に関わった経験や知識を活かし学生への支援を行いたいと思っています。そして人々と関わりながら微笑みの国、タイの文化を楽しむことができます。



ひだい じゅんや
比田井 純也さん
(ケニア/エイズ対策/上田市)

大学生時代に様々な発展途上国へ行って感じたことがありました。それは日本という国は凄く恵まれて国なんだと実感しました。物乞いをしてく子供たちや、生きる為に必死に働く子供たちを見て何か変えることが出来ればと思い協力隊へ参加しました。何が出来るか分からないですが、何か一つでも良い方向へケニアの人々を導ければと思っています。そして一人でも多くの子供の笑顔を作りたいです。

次回の訓練予定

平成21年度第1次隊 派遣前訓練

平成21年4月8日(水)～6月11日(木)

「訓練所の一日」 No.18 ～募集説明会～

こんがり日焼けした顔をキラキラと輝かせ、日本の反対側に住む人々のことをとめどなく楽しそうに語る青年。幸せそうな彼の笑顔を見て、「こんな私にも何かできるかもしれない」そう思った。

JICA駒ヶ根では、年2回(春・秋)のJICAボランティア募集期に合わせて、OB・OGに体験談を直接聞くことのできる募集説明会を長野県各地で開催しています。具体的な現地での生活や活動の話、派遣の制度についての話、個別応募相談など盛りだくさんの内容です!さらには、年2回訓練所内で「一日体験入隊」を実施!実際に語学授業を体験したり、訓練中のボランティアと話をしたりと応募への期待と意欲が高まること間違いなしです。

ぜひ、皆さんお気軽にご参加ください。



▲一日体験入隊の様子

